

三つの幸せ

三つの幸せ

明日は体育大会予行練習が行われ、そしていよいよ今週末が体育大会本番。生徒誰もが練習から真剣な表情で活動しています。

その中でも特に各団長を中心としたリーダーの頑張りは目を見張るものがあります。人前に立ち、みんなを動かして、気持ち・動きを一つにしていこうとは、言葉では簡単だけれど、とても大変なことです。うまくいかないもどかしさや葛藤、時にはつらい思いを抱えながら、今を頑張っています。自分のことよりも、他者の為に自分がどれだけ自分の体を動かして、仲間とともに創り上げていくか、その為のリーダーとしての大事な『資質』があります。

高橋佳子さんという先生が考えられた「三つの幸せ(喜び)」という話があります。それを今回は皆さんに紹介します。

「三つの幸せ」の一番目は「(して)もらう幸せ」です。赤ちゃんはお腹が空いて大きな声で泣けば、お母さんからお乳を「もらう」と泣き止みます。おしめを取り替えて「もらう」と泣き止みます。赤子の時は何かを「してもらう」と嬉しくて泣き止みます。我々大人でも中学生でも誰からか物をもらったり、優しくしてもらったりすると嬉しい、幸せな気持ちになります。何かを「もらう」と嬉しい。「これが一番目の」(して)もらう「幸せ」です。

小さい子どもが今まで母親から食べさせてもらっていたのを、今度は自分で箸を使って何となく使えるようになる。自分で食べようとしています。今までできなかったことができるようになる。嬉しいから、自分で食べようとするし、お着替えもしようとしています。自転車に乗れるようになる、サッカーでシュートができるようになる、楽器が弾けるようになる等々、今までできなかったことができるようになる「と喜び、幸せな気持ちになります。これが二

番目の「できる幸せ」です。

しかしながら、最近はこれらの誰からか「してもらう」、自分だけ「できるようになる」幸せで終わってしまう中学生が多いように感じます。それでは学校も社会も円滑に行かず、ギクシヤクしたも

のになってしまいます。

そこで大事になるのは三番目の幸せです。子どもが家庭で進んでお手伝いを「してあげる」と、家族の方はとても喜ばれます。友達が困っている時に何かを「してあげる」と友達はとても喜びます。他者が喜んだ姿や表情を見ると自分も嬉しく、幸せな気持ちになります。これを三番目の「してあげる幸せ」と言います。西南中で言うと「他への貢献の幸せ(喜び)」ではないでしょうか。

人に何かをしてもらわないと満足できない、自分さえできればいい、「この二つで終わってしまうのか、三番目の「してあげる幸せ」を感じられるのか、ここが意味、子どもと大人の大きな境界線です。「してあげる幸せ」を感じられる人は、中学生でも大人だし、それが分からない人は大人でも、心は子どもなのです。

それをリーダーに限らず上級生の三年生・二年生が体感して掴み取る機会が体育大会の成功につながります。自分のことより、団の為に、学校の為に、何かを他者のためにしてあげなくてはなりません。その時に大事なことは、「してあげる幸せ」ができるかどうかです。

まずは自分が感動するぐらい、自分が頑張ることです。自分が「気持ちいい」と感じるぐらい、人の為に一生懸命頑張ることです。二番目の幸せができる人の周りには、自ずと良い人が集まります。想いを一緒に叶えてくれ、良い人生にしてくれます。

“一生懸命は気持ちいい”、“一生懸命はカッコいい”を感じてください。そして“一生懸命創り上げたものは、人に一生懸命に見てもらえる”ものです。それが人生の大事な原理・原則なのです。

参考文献

「あとから来る君たちへ
伝えたいこと」

鍵山秀三郎